

草津川跡地の全域を一つの「緑軸」としてとらえ、「ガーデンミュージアム*1」というコンセプトのもと、まちなかと琵琶湖をむすび、人と人をつなぐ、全国に類を見ない草津市ならではのオンリーワンの魅力空間づくりを進めていきます。

周辺市街地の連携・連続性にも配慮しながら、市民、事業者、行政などが一体となったエリアマネジメント*2手法により、永く市民に愛され、多くの人が訪れ、長い年月にわたり利用されるにぎわい空間として都市価値の向上につなげていきます。



周辺の農空間と連携し、環境にやさしい農業をテーマにしたガーデンを形づくります。新鮮な食材提供など、マルシェガーデンとも連携します。

エコ・ファーム
ガーデン



ナチュラル
ガーデン

ありのままの自然の花や木の姿を活かし、植物の生きる力が伝わる、安らぎや癒しを基調としたガーデニング手法により組み立てます。

マルシェガーデン

地産産品の品をあつかう市場、カフェ、レストランなど、集客機能を備えたにぎわい空間の核とします。



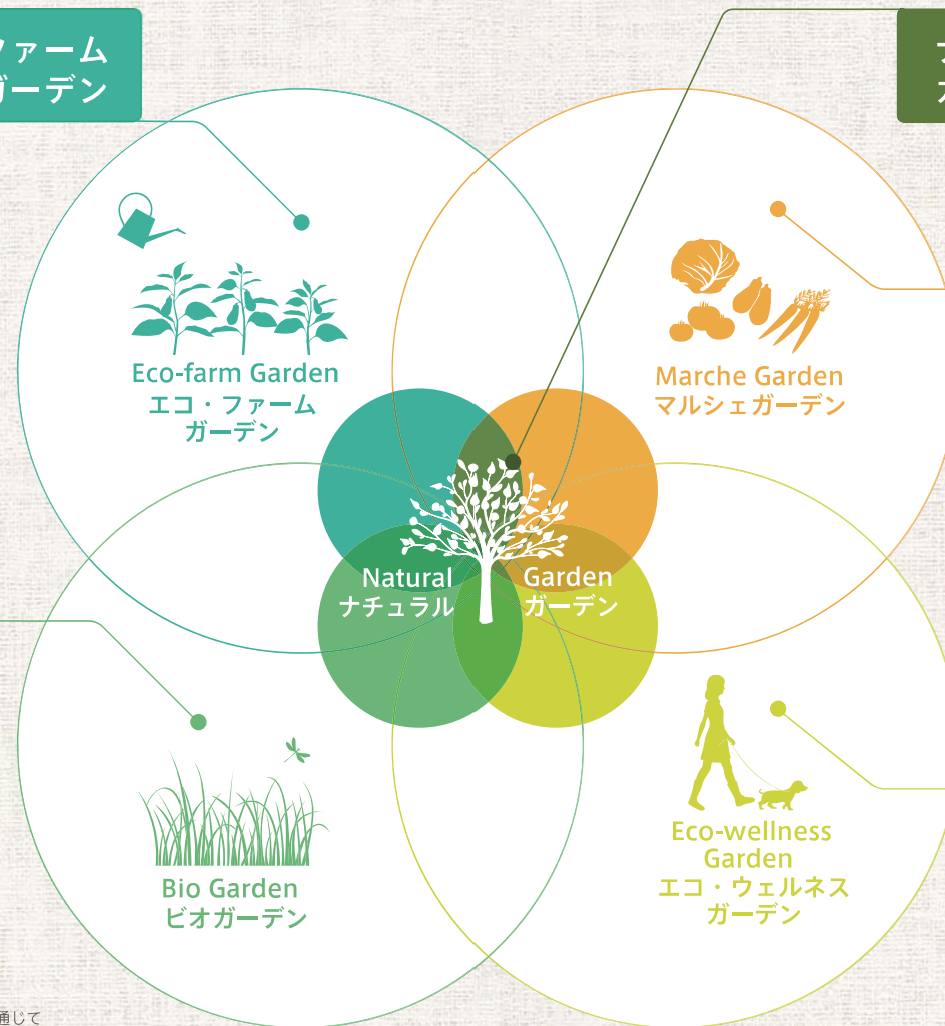
環境共生をテーマに、雑木林や水辺で自然と遊び・学ぶ空間をつくります。

ビオガーデン



エコ・ウェルネス
ガーデン

健康づくり、子育てや遊びなど市民の憩いの場となる空間を創ります。



*1 ガーデンミュージアム：草津川跡地の空間像を示した言葉。「人と自然」「人と人」がつながり、時の流れの中で成長し、様々な活動を通じて創出される、生き生きとした風景とします。

*2 エリアマネジメント：一つの目標に向かって、地域が長い年月をかけて発展し続けられるようにするため、市民、事業者、行政など多様な主体が一つの組織の中でつながり、役割分担、共同行動できる新しい仕組みをつくるものです。

広大な草津川跡地を私たちの手で 新たなまちのシンボルとするために



景観デザインの取り組み

計画理念に基づいて豊かなみどり空間を実現するために、以下のような景観デザインコンセプトを設定します。

※3 ヒューマンスケール: 人と空間との関係を、人間の身体や体の一部分の大きさを尺度にして考えること。人間の感覚や動きに適合した、適切な空間の規模や物の大きさのこと。
※4 ユニバーサルデザイン: 高齢であることや障害の有無などにかかわらず、すべての人が快適に利用できるように製品や建造物、生活空間などをデザインすること。

景観デザインにおけるコンセプト

- 歴史性の継承**
天井川、堤体、街道といった固有の空間特性を意識し、新しい空間化につなげます。
- 自然との共生**
未来に向け「自然と共にいきる」ライフスタイルを目指し、自然環境、草木との一体感などを基本とします。
- 人間性の尊重**
ヒューマンスケール※3、親しみやすさ、ユニバーサルデザイン※4といった要素を重視します。



コミュニティデザインの取り組み

いかに質の高い空間を整備しても、それが使われなくては意味がありません。市民が「ガーデンミュージアム」という空間に愛着を持ち、永く利用され続けるためには、利用する市民がつくる側にも立って、計画策定の段階から参加し、共に空間を育てていくことが重要です。そして、人と人のつながりの輪、活動の幅が広がれば、さらに様々な形で発展・深化していくことが期待されます。そのような空間づくりを進めるためには、まずは市民参加のためのコミュニティ形成の場や土台づくりが大切であることから、空間を様々なかたちで共に考え、行動する熱心な担い手を発掘していきます。そこから人のネットワークをたどってコミュニティづくりを促していきます。

このように、市民をはじめとした様々な活動主体のつながり(コミュニティ)づくりを促すことにより、狭義の整備だけでなく、計画策定などの過程や整備後の管理・運営、利用を含めた広義の空間づくりに主体的に関わっていただき、継続的に「ガーデンミュージアム」が利用される仕組みをつくることを、コミュニティデザインとします。

持続可能な協働の取り組みが進められるように、以下のコミュニティデザインのコンセプトを設定します。

コミュニティデザインにおけるコンセプト

- 公共空間づくりへの市民参加**
市民が共に学び、考え、つながりを強める場をつくります。
- 市民が主役となる行動計画**
創作、交流の場など、市民の自発的な活動を展開します。
- 市民と行政の協働による仕組み**
多様な主体が連携するエリアマネジメントの仕組みを導入します。

防災・都市環境デザインの取り組み

阪神淡路大震災や東日本大震災における教訓から「なんとしても人命を守る」という考え方を基本にすえて、ハード・ソフト施策を総動員して防災性の高い空間づくりを目指します。

草津川跡地の広大で、連続した空間は、地形そのものが高い防災性を備えたハードといえます。まず、日頃から多くの人が良く利用すると共に、日常時の市民活動の中に防災の取り組みというソフトが合わさることで、いざという時に、日々の習慣的な防災意識を思い起こし、自助・共助を可能とする空間づくりを目指します。

